

# カミュ『異邦人』における「無関心」

鈴木 忠 士

## 第V章 自然的世界

### 3 躁 と 鬱

#### 前提的考察

A. メランコリー親和型性格

B. 躁鬱病の病前性格と病状

(1) テレンバッハ——「秩序志向性」

### 4 父親イメージと母親イメージ

A. 父親イメージ……（この項の途中まで前号）

B. 母親イメージ

(1) ムルソオの母……（この項の終りまで本号）

#### V-4-A. 父親イメージ（つづき）

(11) 検事——エディプス・コンプレクスの「古典的な図式」から見ると、検事は紛う方無くエディプスの三角形の一角を占める〈父〉、それもライバルの〈父〉を殺そうとした廉で罰として〈息子〉を去勢する「暴力的な父」の典型であるに見える。検事は「最も憎むべき犯罪，父殺し」について「もまた」ムルソオは「有罪である〔……〕だからこそ罰せられなければならない」（144）と断じ、「首を要求」（145）するからだ。

だが、そうした図式解釈からすると不可解なままに残ることが一つある。古典的な精神分析学の説くところでは、「人間社会」（144）にとって「最も憎むべき犯罪」とは、エディプスの「二大犯罪」即ち「母との近親相姦」と「父殺し」<sup>83)</sup>のことなのだが、検事は論告において、ムルソオを「社会の最も本質的な掟を認めない」（145）者と極め付けながら、「父親を亡き者にし」よ

うとする願望を根底において動機付けている「母親を所有しようという願望」には触れずじまいなのである。それどころか、「父殺し」の「犯罪が彼に与える恐怖より」、ムルソオが母親の死に際して示したような「無感覚に対して感じる恐怖が、むしろ勝るくらいだ」(144)とまで言っている。〈息子〉の分離独立はある意味で「心の中で〔精神的に〕母を殺」(144)すことによって成し遂げられるのだから、エディプスの「古典的な図式」に当て嵌めてみると、これではまるで〈父〉が〈息子〉の母親離れを遺憾とし、〈息子〉に母親との近親相姦的な結合を使嗾しているかのようである。そこで、図式を離れて、テキストそのものに帰ってみよう。

検事と弁護士「二つの弁論はそれほど違っていたらうか」(139)とムルソオは自問して、両者を同列に扱っているかに見える。しかし、ムルソオの語りのテキストそのものが提示する検事の肖像は、弁護士のそれが「滑稽」な「操り人形」に似たものにすぎないと言いたのに較べ、明らかに対照的な「違」いを見せている。

検事の姿を最初に眼にしたときムルソオは、「痩せた大柄な男が、赤い服をきて、鼻眼鏡をかけ、法服をていねいに折りながら座った」(121)と言う。いかにも「威厳たっぷり」(27)であって、「赤」もここでは正に「権威」の象徴である。

検事の「大声と僕にむけられた勝ち誇った視線のせいで、僕は何年来初めてのことだが、泣きたいという馬鹿気た欲望に襲われた」(127)とムルソオは言う。同じく「勝ち誇った予審判事には「否定」(100)を貫き決して「涙を流す」ことのない「頑なな魂」と匙を投げられた男が、司祭をして「両眼に一杯涙をためて」(170)見返らせた男が、彼を「裁く」父親代理者の前で「初めて」敗北を予感しているのである。ムルソオが「初めて、自分が罪人であることを理解した」とき、「検事は眼に皮肉な光を湛えて」彼を「見詰めていた。」(128)「検事側の証人に泥をかけ」る弁護士側の「策略」に「反対して激しい勢いで (avec violence) 立ち上った。」(128)「けたたましく

勝ち誇る弁護士を圧倒して検事は「我々の頭上で、雷のように怒鳴って、言った。」(129) ベレに「被告が泣かなかったのを見たか」と尋ねる弁護士のレトリックの戯れを「行き過ぎだ」とムルソオは言う。ベレと弁護士の問答に「傍聴人〔観客〕は笑った。」 弁護士は凶に乗って「これがこの訴訟の姿です。すべては真実であり、何も真実ではない！」(130)と叫ぶ。どうやら弁護士の「戦術」(150)は「訴訟」を「真にうけな」いで「遊戯〔演技〕(un jeu)」(92)に変えてしまうこと、すべてを茶化すとともに自らも「行き過ぎ」の身振りによって「滑稽」な「操り人形」に化することにあるようだ。ところがそのような道化芝居を前にしても検事ひとりはその威容を崩さず「頑なな表情をして、書類の題字に鉛筆を立てていた。」(130) 証人台のマリーには「マリーの羞恥心も理解するが、しかし、(ここで語調を一段ときびしくして)、彼の義務が、礼儀を超越することを命ずるのだと言った。」 「僕〔ムルソオ〕が彼女を知った日の要約を」マリーが「述べ」終ると、「検事が立上って、しごく荘重に(grave)、僕には本当に感動していると思われた声で、僕の方を指さしながらゆっくりと言葉をきって言った。」語り手の口吻には、弁護士について語るときとは異なって、揶揄の色が全く窺われないことに注意しなければならない。弁護士がまたもや「一体全体、彼が告発されたのは母親を葬ったからですか、それとも人を殺したからですか」と茶化して、「傍聴〔観客〕席」の「笑」(136)いを誘うと、「そうです、《私はこの男を犯罪人の心を以て母親を葬った廉で告発するのです》と」検事は「力をこめて(avec force)叫んだ。」 検事の断固たる姿勢は、弁護士の道化た態度とは対照的に「公衆にかなりの効果を与え」、弁護士すらも「動揺しているようだった。」(137)

検事の弁論は終始一貫してムルソオの「有罪を告発し、言訳を認めない」(139)ものだ。確かにムルソオは検事の弁論のうち「僕の興味を唆ったのは、単に断片、身振り(gestes)、又は全体から切り離された長台詞(tirades)の羅列だけだった」(140)と述べて、検事を一個の役者に見立ててもいはする

が、他の父親代理者達に対して見せたような「戯画」化を試みようとはしていない。それどころか、検事の「見解はなかなか明快」で「彼の言うことはさもありなんとと思われるものだった」(141)と、「彼が正しいことは認めざるを得なかった」(142)とすら言っているのである。

検事はムルソオが「予め犯罪を計画した」ことを「証明」(140)し、「寛容という全く消極的な美德」を捨てて「より困難な、しかしより高い正義という美德」に立って、「道德原則」を「何ひとつとして〔……〕受けつけない」(143)、「社会の最も本質的な掟を認めない」ムルソオという「怪物」(145)を、「社会を滅亡」(143)から救うために、「人間社会から離反」(144)させなければならないと説くのである。

こうしてみると、語り手ムルソオが提示する検事の人物像には、「理想」としての〈嚴父〉に求められる属性の一切が備わっていると言える。更に、ムルソオに「見出されるような心情の空虚」(143)や「無感覚に対して感じる恐怖」,「人間の心の最も基本的な反応」(145)を云々する検事には〈慈父〉の資格も備わっているようである。この〈慈父〉としての半面故にこそ〈嚴父〉としての役割と「義務は苦しいもの」と感じられるが「しっかり遂行するつもりだと言った」(145)のだと考えられそうである。ムルソオは少なくともここ「何年来初めて」のことだが〈嚴父 = 慈父〉にまみえることができたというわけになる。そして、「衷心から、殆ど愛情とも言ってよい気持を籠めて」(142)検事に接したいのだという彼の言葉は、彼が〈息子〉として遂に「衷心から」畏服し且つ敬愛して同一化することのできる「理想」の〈父〉に出会うことができたことを物語っているかのようである。

ところで、前節3のA-(3)-b-ロ-iii『メランコリーの罪責意識』の項で指摘したように、語りの上に現われている検事の「弁論」(140)と審理経過なるものは、その元の「全体から切り離され」て主人公 = 語り手の無意識的な「動機」(146)や「関心」(118)によって再編成されたものなのである。とすると、「弁論」とそこに受ける印象によってムルソオが語り伝える〈嚴父 = 慈

父〉としての父親像というものも、彼が求めて倦まない〈父〉の「理想」を象ったものと言えることになる。

だが、〈父〉検事は終始一貫して〈息子〉ムルソオに「意地悪」(125)で「嫌悪」の念しか示さない。「怪物」を前にして覚える「恐怖」を語り、「社会とは何の関係もない」(145)存在としてムルソオを抹殺しようとする。つまり、検事は少なくとも被告ムルソオに対しては初手から〈慈父〉であるところではないのだ。この点、例えば初対面の裁判長が「好意の匂い」(124)を感じさせ、司祭の態度が「とても優しい」(162)と感じられたのとは大層異なっている。

又、やはり『メランコリーの罪責意識』の項で明らかにしたように、検事の「証明」なるものは、「明快」とか「さもありませんと思われるものだ」とかいう語り手の主張にも拘らず、「客観性」(123)に欠け、条理を無視したものだ。死刑囚ムルソオが正しく指摘するように、検事の論告求刑は、要するに、「殺人の廉で告発」しながら「母親の葬式で泣かなかったために死刑を執行」(170)せよというものなのである。「言葉の価値を心得て」(142)いる筈の検事がそうした背理にも盲目となって「心も軽く」ムルソオの「首を要求」(145)して已まないとすれば、〈父〉検事には〈息子〉ムルソオを是が非でも断頭台に送り込もうという偏執があるとしなければなるまい。

とすると、ムルソオの語りは検事を基として「理想」の〈父〉を象る方向を目差しながら、他方での残虐且つ「暴力的な父」の登場への無意識的な願望によって著しい偏向を来しているということになる。実際、これも『メランコリーの罪責意識』で指摘しておいたことだが、被告ムルソオには検事の弁論の臆断と非論理性をそれと知りつつ看過し黙許する姿勢が窺われるのである。

そこで、検事が論告を死刑求刑で結んだ後で、ムルソオが「自分の滑稽さを意識しながら、あれは太陽のせいだと言った。広間の中で笑い声が聞えた」(146)というように自ら好んで「滑稽」な振舞いに出るというもの、「暴

力的な父」検事の前で「戯画」化され去勢される〈息子〉の位置に自ら安んじて就こうとしているからなのだと考えられよう。つまり、残虐な「暴力的な父」検事に寄せる被告ムルソオの無意識的な願望とはマゾヒストのそれなのだという事だ。確かに、法廷で敵対する検事に「愛情を示す権利」(142)を云々する被告ムルソオの場違いな心理は、そうした文脈に照すとよく理解できるものとなる。だから、「検事や裁判官達のムルソオに向ける悪意は、誰しものがそしてカミュ自身がそうであるように、〔息子としての〕ムルソオが自分の父に付し且つ自らも父に向けていた憎しみの転移にすぎない」<sup>(84)</sup>などと言ってはならないのである。

しかしながら、同じく『メランコリーの罪責意識』で確認したように、審理の経過と検事の弁論に偏向をもたらししているものは母親殺しという偏執的なモチーフなのであり、語りの水準で言えば、主人公＝語り手ムルソオの心中に潜在する「心の中で母を殺した」という妄想的な罪責観念なのである。とするなら、この「暴力的な父」検事のイメージすらも、〈息子〉ムルソオの無意識的罪責感の呼び迎えたもの、〈息子〉を処刑台上で待ちうける怨霊としての〈悪い母〉の「傀儡」にすぎないのだということになるであろう。「殺人の廉で告発されながら、母親の葬式で泣かなかったために死刑を執行される」(170)という死刑囚ムルソオの言葉は、そうした解釈の正しさを証し立てるものである。

(12) セレスト——ムルソオを「友達」(131)だと言うセレストの身の回りには妻の姿も子供のそれもない。そして「被告側から召喚され」(130)て証言台に立つセレストは、被告ムルソオと同じ〈息子〉の位置にあると先ずは解される。だが、彼の「白い口髭」(42)からすると、ムルソオの父親代りを務めうる人物でもある。実際、母を亡くしたムルソオに「母親はひとりしかいない」(10)と同情を示し、「なんとかやってらっしゃるか」と気遣わし気なセレストは庇護的な〈慈父〉の役を果そうとしていると言える。ところがムルソオの方は、「そうだと言い、腹がへっていると云った」(42)というよ

うにどこかうるさがる風が見える。

証人としてのセレストは「あれは不運です」と繰り返すばかりで、「不運」をすら「裁く」(131)のだと言う裁判長の姿勢とは対照的である。そして、「彼の知識と善意を使い果してしまったかのように、セレストはそのとき僕〔ムルソオ〕の方を向いた。彼の眼は光り、唇はふるえているように思われた。彼はまだ自分にできることはないかと僕に尋ねているようだった。」(131-132)これは〈父〉というよりはむしろ、窮地にある〈息子〉を救うために全身全霊を尽くす〈母〉の姿ではなからうか。

「あとの審問の間中、彼は少し前屈みの姿勢で、肘を膝の上におき、パナマを両手で持ったまま、そこにじっとして (il est resté là), 取り交されるすべての言葉に耳を傾けていた。」(132) ここに見られる主人公 = 語り手ムルソオの視線に籠められた暖かさ、例えばベレを「関節の外れた操り人形」と観ずる眼差しの冷やかさを比べるといい。セレストが「相変らずそこにいて (Il était toujours là), 太い腹、いつもの前掛け」(42)をしていたと言われ、ここでも「そこにじっとして」いたと言われていることに注意しよう。そして、ムルソオの母が「ママはいつも黙って僕のすることを眼で追うだけであった」(12)と言われ、その分身と看做しうる「スパニエル犬」がムルソオの分身であるサラマノによって「いつまでもここを動かないんだ (Il était toujours là)」(44)と言われていたことを想い起こそう。ムルソオの母親も、その分身である、サラマノの飼犬も、「いつも」〈息子〉あるいはその代理者の傍に「じっとして」いる。しかしそれは、ただ「黙って」ひたすら「愛情を示」されることを求めてか、あるいは「憎しみ」と「恐怖心を籠め」(43)て〈息子〉の傍に留まり続けるのである。セレストも〈母〉の位置にあり「母性愛の代理者」なのだが<sup>85)</sup>、「反対給付なしに愛」そうとするのであり、そのように「愛されるようになっている」<sup>86)</sup>ムルソオは最愛の〈息子〉の位置にあるわけなのだ。作者カミュは「あなたの作品の中で特に愛着を持っている作中人物はありますか」と問われたとき「マリー、ドラ、セレスト」<sup>87)</sup>

と答えているが、それぞれの作品中で明らかに母親代理者を務めている女性の登場人物に並んでセレストの名が挙げられていることから、彼に振り当てられている役割の如何がよく了解されるであろう。

検事が〈敵父〉としての面貌によって〈息子〉ムルソオの評価を受けていたのとは対照的に、セレストはその母性的な〈慈父〉の風貌によって無上の評価を受けているとすることができる。物語の幕切れで、セレストがレエモン「よりすぐれた人物」(170)とされているのも故無き事ではないのである。

ただ、証言台で力尽きたセレストを見守るムルソオが「僕は何も言わなかったし、身振りも何ひとつしなかったが、生れて初めて男を抱きしめたいと思った」(132)と述懐するとき、そこに読者はひとつの役割転倒を見ないわけにはいかない。つまり、誠を尽くして力及ばなかった「男」即ち〈息子〉に心打たれて「生れて初めて」というほどの強い「愛情」を覚えている〈母〉の姿を。結局、〈慈父〉セレストは、本質的には〈よい母〉であり、且つ〈よい子〉であると言することができる。

(13) レエモン——彼も又、ムルソオの「友達」であり「仲間」である。そして〈父〉検事に「共犯者」(136)と極め付けられている。従って、彼はムルソオと同じ〈息子〉の位置にある者と言することができる。母を亡くしたムルソオに「しっかりしなければいけない」(51)と励まして、庇護的な姿勢も取りうるかに見えるが、しかしそれはこの時限りのことである。全体として見ればむしろムルソオの方が保護者の立場にある。アラブ人達との二度目の対決の場面にもそのことははっきりと窺えて、ムルソオがレエモンの「昂奮」(83)を制御して「ピストル」(84)を預けさせなかったならば、レエモンは「ひとりで逆上してきつと撃」(83)っていたであろう。

大体レエモンには〈父〉の要件が備わっていない。彼は自称「倉庫係」だが、「近所では、彼が女を食いものにしていう噂」(44)であり、彼の「情婦」(46)も彼を「ひも」(57)と呼ぶ。ムルソオを「女郎屋」に誘って、「そんなことは嫌いなので、いやだと断わ」(58-59)られてもいる。



レエモンは彼の「情婦」が「ごまかし (tromperie) (47) をしているとマルソオに訴える。「ごまかし」とは、「情婦」がレエモンの知らない「腕輪を二個」(48) いつの間にか持っていて、それは他の男から貰ったか稼いだかしたものに違いないということなのだが、要するにレエモンは「欺された夫 (mari trompé)」にされてしまったことに怒っているわけなのだ。寝取られ男は「侮蔑」の対象である。何故なら、父権社会において「主体にして能動者 (l'agent) であるはずの男が、客体のうちで最も《受動者》であり、最も《受け身》である存在、つまり自分の妻によって、客体にして受動者 (patient) の地位に引き下げられたのである」<sup>88)</sup>から。レエモンは「被去勢者」であり、しかも女によって去勢された者であるということになる。

別の挿話の中でもレエモンが「被去勢者」の印を身に帯びていることが確かめられる。彼が「情婦」を「懲らしめ」(49) ているところへ「巡査」がやってくる。「《俺に物を言うときは、口から煙草 (ta cigarette) をとれ!》と巡査 (l'agent) が言った。レエモンはためらった。僕 [マルソオ] の顔を見て、煙草を強く吸った。このとき、巡査が彼の頬っぺたに力一杯、重く厚味のある平手打ちを食わせた。煙草は数メートル向うに落ちた。レエモンは顔色を変えたが、すぐには何も言わず、やがてへり下った (humble) 調子で吸いさしを拾う (ramasser son mégot) がよいかと尋ねた。巡査はよろしいと返事して付け加えた。《だがこのつぎは、巡査はお人形 (un guignol) でないことが分るようにしてやるからな》」(56-57) レエモンはこの場面で「男子たるもの (un homme) (57) という言い方をしており、又彼の「女の兄弟」(46) に喧嘩を売られたときも「男 (un homme) じゃねえ」(45) と蔑められて喧嘩を買っている。だから彼が「ためらった」のも、「顔色を変えた」のも、「煙草をと」ることに「男」が懸かっていると考えたからであり、「僕の顔を見て、煙草を強く吸った」のも「男 (un homme) (46) として認めている「僕 [マルソオ]」の前で自分も又「男」であることを証し立てたかったからに他ならないのである。そうした全体の文脈に照して細部の表現を見直すと、「煙

草」は「男根」<sup>89)</sup>であり、それが巡査の「平手打ち」で「落ちた」ことはレエモンの「去勢」<sup>90)</sup>を意味することになる。更に「吸いさし〔モク〕を拾う」行為はそれ自体「へり下った〔卑しい〕卑屈な印象を与えかねないが、「ピンや栗を拾う」(ramasser des épingles, des marrons)ということが「受身の男色行為をする」ことを意味しうるとするのも「受身の男色者は物を拾うためにように身をかがめるから」<sup>91)</sup>でもあるとするならば、レエモンが「吸いさしを拾うがよいか」と問うたことは男色行為における「受動者」たらんとする象徴的な意思表示であると、「《弱さ》、《無能力》、《男らしくないこと (dévilitation)》」と「主体」<sup>92)</sup>の放棄を暗示するものであると解することができるであろう。その場合、「巡査 (l'agent)」は「能動者 (agent)」の役を受け持つことになる。そうした観点から見れば、「巡査」の「巡査はお人形 (un guignol) でないことが分るようにしてやる」という言葉は意味深長である。「お人形」という言葉が使われたのは、先ず〈guignol〉が隠語で「巡査〔憲兵〕」を意味することからする言葉の戯れからであり、又「巡査」は自分が人形劇の「指人形」(guignol)のような「笑い者」(guignol)ではないと言いたかったからなのである。だが又、〈guignol〉が「男根」をも意味しえ、そしてそれはおそらく「萎えた男根」(guigui)に関係があるとするなら<sup>93)</sup>、この「巡査 (l'agent)」の威脅は「今度」こそはレエモンを実際に男色行為の「受動者」に貶めてやるという脅しなのだということだ。

## B. 母親イメージ

(1) ムルソオの母——息子のムルソオに母が語り伝えた、父にまつわる思い出の中で、「正確」なものとしては唯一つ、それもおぞましい挿話が遺っているだけである。母の心中がどうあれ、これを耳にする息子は、母の父に対する「薄情」(93)を想わずにはいられまい。他方、息子が母について語る思い出は、第IV章中の『ムルソオと母』の項で見たように、量も内容も大層貧弱であって、少なくとも見掛けの上では、「冷淡」(140-141)という印象を

免れない。そして、「この二つの事実の系列の間に、深い、悲痛で、本質的な関係がある」(137) という予感がする。

ムルソオが母を亡くして、抑鬱状態に陥り、それが又増悪していく次第を、拙論は本章第2節E『メランコリー』の項及び第3節A-(3)-b『返済不可能な負い目の意識』の項で具に考察した。又一方、前節A『メランコリー親和型性格』においては、ムルソオのメランコリーは反応性のものであるばかりではなく、その性格も与っていることを、つまり彼の性格が所謂メランコリー親和型性格と、更には躁鬱病の病前性格と相同的な構造を示していることを確認した。

そこで、先ず言えることは、母を喪失した際の彼の言動が与えた「冷淡」という印象は表面的なものであるということだ。彼「が自然の感情を抑えていた」と言えば無論「嘘」(94)になるのだが、メランコリーのせいで、本人もそれと気付かぬうちに、「自然の感情」が「抑え」られていたということなのである。これは病的な悲哀と呼ばれる心理状態の一つのケースである。ボウルビイは病的な悲哀が示す症状として、(1)「慢性の悲哀」、(2)「意識的〔される〕悲嘆の長期的欠如」、そして「一般的ではない」がとして、(3)「多幸症 (euphoria)」を挙げている。この三つの症状は各々単独に現われることもあるが、(2)から(1)に移行する場合もある<sup>94)</sup>。又、「悲嘆を長期間にわたって意識的に〔それと意識しつつ〕経験しなかった者に、多幸症の反応がみられることもまれではない。そして彼らは、離人症も経験しているであろう<sup>95)</sup>とも述べている。拙論は既に第2節D『共生的身体』、同E『メランコリー』の項において、「悲嘆」の「欠如」としての「冷淡」、「多幸症」とも言える様々な躁の防衛、そして「離人症」様の症状をムルソオの心理過程のうちに確認しておいたのである。

次いで言えることは、こうした心的状態を了解するには<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>反応性の観点に拠るだけではなく、<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>性格という観点にも立つ必要があるということである。メランコリー親和型性格者の中には「夫の埋葬のとき彼女〔患者〕の心は完全

に麻痺してしまい泣くこともできなかった」が「二週間後」には自殺未遂を起こしている事例が見出されるし<sup>96)</sup>、又躁鬱病者では、「躁うつ病者の場合、身近な関連人物の死を経験してから抑うつが出現するまでの間に、悲痛な悲哀が見られることはまれで、むしろ硬直した態度や、さらには逆に無関心な姿勢すら認められる」<sup>97)</sup>のである。

性格は環境因と素質因によって形成される。後者については拙論には論じるに足る用意がない。そこで前者に議論を限定するとして、どのような生活環境の下にあるとメランコリーに親和的な性格が形成され易いのであろうか。この問題についての諸家の説は、前説 A-(3)『倫理』の項で紹介しておいたが、要するに、「幼時ある種の持続的な精神的外傷を受けて」その結果「ひそかに生じたうつ病ないしうつ病等個体への防衛的形成体」がおそらくメランコリー親和型の性格なのであり、メランコリーはこの過去の「心的外傷の再現である」ということだ。そして、この「心的外傷」とは一次的な「共感関係」の経験の欠如あるいは不足のことである、裏返して言えば、根源的な遺棄とそこに根差す「憎悪」の体験なのである。

「幼時」における「心的外傷」ということになれば、母親乃至その代理者との関係において蒙ったものとするのが妥当であろうが、注意すべきは、母親(代理者)が直接的にあるいは事実として「共感関係」を拒み遺棄することは「心的外傷」の生ずるための要件では必ずしもないということである。幼児がその素質としての「その人独自の刻印可能性」<sup>ブレイクバルカイト</sup><sup>98)</sup>から、ある事態を遺棄と受け取りさえすればよいのである。従って、幼児に「心的外傷」を蒙らせる母親の態度というものは、厳密に言えば、一様には規定できないのである。しかし、生得的な性質の問題はひとまず置いて、類型的なモデルに照して具体的な事象を検討するという方法もある程度の有効性をもっている。拙論はここでは環境因に問題を限定したのであるから、ごく一般的な観点からムルソオとその母親の母子関係を考察してみよう。

先に『ムルソオの父』で述べたように、ムルソオのごく幼い頃にその母は

夫との死別を経験したと推測される。夫との死別に際しての妻の反応は無論人様々だ。が、頻度はともかくとして、寡婦が抑鬱状態に陥り、立ち直った後も、様々な影響もあって、その存在様式がメランコリーに親和的なものに固定してしまうということも一つの可能性として考えられよう。

ムルソオの母の場合、息子のムルソオが「唯ひとりの扶養者だった」(11)と言われ、他の親族への言及も皆無であることから、夫との死別が彼女にもたらした衝撃の激しさが想像される。そして、息子との二人暮らしにおいて、第2節D『共生的身体』の項などで指摘しておいたように息子が母親との間に共生的関係を結んでいたとすれば、丁度彼等の分身であるサラマンとその飼犬が「互いに外界と交渉を絶って、狭い部屋の中で暮しているうちに」互いに「似てしまった」(42)ように、母親の方も息子との共生関係の中で生きており、メランコリーに親和的な存在様式に嵌り込んでいたのではないかと推察されもする。彼女は養老院でこそ「友人達」(18)にも「婚約者」(171)にも恵まれたようだが、それ以前は「ママが彼の犬を大変愛していた」(69)という言葉からサラマンと「同じ階の隣人」(42)同士の誼みが推し量られるだけで、あとは「家にいたとき、ママはいつも黙って」息子「のすることを眼で追うだけであった」(12)のである。ムルソオの口吻には母親の共生的依存の姿勢をうるさがる風が窺われる。又、「人はしまいには何にでも馴れて(s'habituer)しまう、と彼女はよく言った」(110)ということからは、彼女の生活がどれほど「習慣」(habitude)に支配されたものであったかが察せられ、やはりメランコリーに親和的な性格が想起されるのである。というのも、メランコリー親和型性格者の「秩序固着性のうちには、慣れ親しんだ状況布置を保持しようとするはたらきが見られる」し、新たに「自らの存在の可能性がひとたび開かれ」た場合にも「それを恒常的に持続させることに執着」<sup>98)</sup>するのだが、それは彼にとって大事なものは「習慣」それ自体なのだからである。だからこそムルソオの母も、「養老院でもはじめのうちはよく泣いた。だがそれは習慣の問題だった。数カ月して、もし養老院から引きとっ

たら、泣いただろう。やはり習慣の問題である」(12)とされているのだ。

それでは、ムルソオの母が息子のごく幼い頃に重度の鬱に陥り、その後も完全に回復するということはなく、鬱に親和的な精神状態に持続的にあったとしてみよう。それは幼い息子にどのような影響を及ぼしたであろうか。「幼児にとっては、母親を喪失する経験や、母親の愛情を喪失するという経験は、実際には死別(bereavement)と同義である」<sup>99)</sup>とすると、幼児の体験するものは一般的には「うつ病ないしうつ病等価体」以外の何物でもないであろう。

ウイニコットによると、幼児の母親(代理者)に対する関係は、「絶対的依存」から「相対的依存」へ、そして「独立への方向」へと進んでいく<sup>100)</sup>。「相対的依存」の段階は「(大雑把にいて)6カ月から2歳位まで続く」<sup>101)</sup>が、この段階での環境側の失敗は、その前段階での失敗が「母性愛欠損 Privation」と呼ばれるのに対して、「剝奪 Deprivation」と呼ばれる。即ち、「環境からの供給が最初は順調にあってそのあとに支障が生じるといった中間的局面」なのであり、「それは、かなりの程度の自我機構をつくりあげること的成功を収めたあと、しかも、まだ個人の内的環境を確立する——すなわち、自立することができるまでには至っていない時期に支障が生じるのである。これは一般的に“剝奪”と呼ばれる」<sup>102)</sup>のである。「剝奪体験のあったとき、個人のなかにはその剝奪が外傷として体験されるための、十分な成長と人格機構とが確立されていたのである。」<sup>103)</sup>(強調部分、原訳書ではゴチック)そして、第一の段階での環境側の失敗は分裂病を惹き起こし易く、第二の段階でのそれは「躁うつ病になりやすい」下地を用意するということである<sup>104)</sup>。

ムルソオの母親が息子の「相対的依存」の時期に夫と死別して鬱に陥り、その結果息子は母性愛の「剝奪」という事態に遭遇することになったとすることは、息子が「父を知らない」と言っていることとも、彼の抑鬱が前節A『メランコリー親和型性格』及びB『躁鬱病の病前性格と病状』で見た如く

メランコリー親和型のそれとして、又、躁鬱病圏のそれとしても扱うことが可能であるということとも、更に又いずれの抑鬱も人生初期に「ひそかに生じたうつ病ないしうつ病等価体」の「再現」であるかもしれないという説ともよく符合するように思われる。ウイニコットの「剝奪体験」は拙論に言う原-体験に相当するわけである。

そうした仮定は又、母親へのムルソオの顕著な同一化傾向と、そこに隠されている敵意(恨み)の存在をもうまく説明することができるように思われる。第IV章『ムルソオと母』の項で見たように、ムルソオとその母親は「同じ種族」のように「似てしま」うのだが、このような同一化は母親を亡くしたという対象喪失の結果生じたものというだけではなくて、母親の生前からして既にムルソオは母親への著しい同一化傾向を有していた節が見受けられるのである。母親が「人はしまいには何にでも馴れてしまおう」と「よく言った」のを耳にしていた息子は「ママの考え」を自らもそれと気付かぬうちに摂り入れ、すべては「習慣の問題」だとして母親を養老院に入れたのではなかったろうか。そして又、前節A-(3)-a『返済可能な負い目の意識』の項で、「家にいたとき、ママはいつも黙って僕のすることを眼で追うだけであった」(12)、「もうながいこと母は僕に何も話すことがなくなって、ひとりぼっちで退屈していたんです」(70)という語り手の口吻に、一切の責めを母親に帰そうとするところに、母親への潜在的な恨みを読みとったのだが、母親の物の考え方を知らず知らず真似て母親を養老院に入れたムルソオの振舞いのうちにはこの無意識的な怨恨が、報復の念が潜んでいたのではなからうか。「話すことがなくなって」いたとしても、丁度ムルソオがレエモンに対してしたようにムルソオ「の言うことに相変らず[いつも]耳を傾けて」(48) いることはできたであろうし、そうすれば、「ひとりぼっちで退屈して」いなくてすんだであろう。だが養老院長の「お母様はどうもお友達の在院者の方々に、宗教に則ったお葬式をしてほしいとよくおっしゃっていたようです」という言葉と、それに続くムルソオの「ママは、無神論者ではなかった

が、生前は宗教について考えたことは一度もなかった」(13) という独語との齟齬が端的に物語っているように、ムルソオとその母親の間には言葉を介してのコミュニケーションは乏しかったようなのだ。そうしてみると、「ママは黙って僕のすることを眼で追うだけであった」という息子の言葉には怨嗟の響きが聞きとれるし、彼のレエモンによく「耳を傾け」る態度は、希んで叶えられなかった母のそれを自ら模倣し演じているのだと言うことができよう。このような解釈は、第2節E『メランコリー』の項で明らかにした、ムルソオとレエモンの「男同士」(52)の関係の深層にある幻想の母子関係の存在ともよく符合するものである。

「ある弁別された特定の個人に対して接近しようとする場合や、その接近を維持しようとする場合に示される行動形態」<sup>105)</sup>としての「愛着行動の生起がもっとも容易でしかも強く、そして長期的に持続するのは生後一年の後半からそれに引きつづく2年間であって、もし、この間に子どもを愛撫する者がいないと大きな不幸がもたらされる〔……〕。したがって、離別や拒否や拒否的な脅しによって子どもがもっとも傷つきやすいのもこの時期である。」<sup>106)</sup> メランコリー期にある母親の「心は完全に麻痺して」いて「人生は完全に《無意味》に思え」<sup>107)</sup>るので、「子供とのつながりを感じる事ができ」ずそれは「よそよそしいものに見え」<sup>108)</sup>ることであろうから、彼女は幼児の「愛着行動」に応えることができない。又、緩解した後もメランコリーに親和的な形でその性格が固まってしまうとすれば、彼女の応答は「愛の仕事」という様相を呈することになる。一方、幼児の方は、そのような母親にもやはり「愛着行動」を示し続ける。というのも、母親は幼児にとってこの世で最初で最大の愛の対象だからである。そして「母親は一人しかいない」(10)ので、どのような母親であろうと「結局のところ、彼女は彼の母親なのだから。」<sup>109)</sup> メランコリーの本質は前節B-(1)『テレンバッハ——「秩序志向性」』の項で述べたように、共に生き共に感じることの不能にあるから、子供の「感じることを感じる能力」<sup>110)</sup>を阻碍されている母親は、「合体



し共感を求める」状態と「独立」の状態「とのあいだを往来する」<sup>111)</sup>という「相互依存」の段階にある幼児に「拒否」を、遺棄を感じさせることであろう。幼児はそこで母親に激しい「敵意」<sup>112)</sup>を向けるが、それは抑圧される。この過程は拙論に謂う原-体験に相当する。原-体験とはこのように「持続的」なものでその結果が「精神的外傷」をもたらすのである。過程としてのこの原-体験を通じて、個人の愛着行動の構成が、「生涯における愛情のきずなの型が決められる」<sup>113)</sup>のである。若きカミュが正しく洞察した通り、「息子が母親に抱く奇妙な感情〔違和感〕が、〈彼の感受性すべて〉の基になる」<sup>114)</sup>のである。

愛着行動の阻碍から生ずる「障害のもっとも一般的な形態の一つは、愛着行動の過度な生起で、〔……〕他の形態は、愛着行動の部分的あるいは全面的不活動性 (deactivation) である」が、ムルソオのようなケースでは、一方では「愛着行動」への母親の側からする応答の乏しさを重ねて経験するうちに、「愛着行動」を手控えることによって「精神的な外傷」の深化を少しでも食い止めようと計るであろうし、他方では、母親と「離別」しているわけでも「拒否的な脅し」を蒙っているわけでもないのだから、母からの応答への希望も無くなりはしないであろう。従って、内には、抑圧された分だけ強烈に噴出せずには已むまい「愛着行動の過度な生起」の可能性を秘め、外に対しては「愛着行動の部分的あるいは全面的な不活動性」を示すことになるであろう。「愛着行動、思考、感情を媒介するシステムの不活性化は、愛着行動と感情を活性化させるさまざまな感覚的刺激の流入の防衛的排除によって、ある程度完全に達成されるように思われる。それによってもたらされる状態は、部分的あるいは全面的な情緒的離脱である。」<sup>115)</sup> この防衛機制としての「情緒的離脱」こそ成人したムルソオが常態において示す「平静 (calme)」(127) や「冷淡〔無感覚〕 (insensibilité)」(93) の本体をなすものなのである。又、セレストに対して「生まれて初めて男を抱き締めたいと思った」り、前章 A-(3)-b-i-i の項で分析した、検事にまで「愛情を示」そうとす

る心の動き、精神医学の観点からすると「躁うつ病者の心情性に見られる、心暖かではあるが、べとついてくることがまれではない感傷性、我を忘れたように映る感情表現、感情の横溢が相手構わぬ節度のない人の好きや無性格でしまりのない感情にまでなる傾向」<sup>116)</sup>と言われうるような心情のあり方は、阻害され抑圧された「愛着行動」への衝迫が時をえて、あるいは時ならぬときに迸り出る姿なのである<sup>117)</sup>。

又、「子供がその振りをしたりその対象であるかのように振舞えば、対象の一部になるか、対象そのものになることができる、という子どもの錯覚的空想 illusory fantasies」<sup>118)</sup>が、この母性愛の「剝奪体験」に際しても働く。即ち、「子どもは、両親があまりにも冷たく、無関心であったり、あまりにも攻撃的、あるいは権威的であるために、両親との間で満足のゆく関係を得ることができないと、まるでそれが自己自身の内部に手に入れたい人物を専有する一つの方法でもあるかのように、両親との同一視によって、あるいは両親と同じようになることによって、隔離感と孤立感に対する埋め合わせをつくり上げようとする」<sup>119)</sup> 勿論ここで「子ども」の側からする同一化の、言わずもがなの前提とされているものは、「両親」に対する「子ども」の愛着と敵意である。「愛情対象に対する激しい敵意こそが内的対象喪失を引き起こし、その結果として、退行的・原始的・自己愛的同一化すなわち対象との部分的ないし全体的融合の空想に頼らせる」<sup>120)</sup>のである。自分が母の「部分」さらには「全体」ですらあるなら、実在の母は愛の対象として外界に求められる必要はない。「対象への愛は棄てきれないで対象だけが棄てられる」<sup>121)</sup>のだ。ムルツォは、母を養老院に入れるその遙か以前に母を「心の中で」棄てていたのであり、又それは幼い自分を棄てたと見えた母の振舞いを真似ただけのことなのである。

とは言え、他方ではやはり子供は、そして彼が大人になって後も、外界に母親（代理者）を求め続ける。「空想」の中に捕え込まれて抜け出せなくなった場合は別として、人は現実の中で「空想」が実現されることを願って已

まない。何故なら「同一化」のそもそもの動機は、そして「同一化」に基づく「空想」の目差すものは、「剝奪」された「母性的愛撫」への渇きであり、自らの外側に在るものとして見え始めてきた母親（代理者）との愛の交流、自らの「愛着行動」に対する母親の側からの愛の呼応であるから。成程『異邦人』において専ら問題とされているのは、ムルソオの「薄情」であり、息子の母親に対する愛の如何である。だが、それは見掛けのことにすぎない。物語りも大詰めになってムルソオは「他人どもの死が、母の愛 (l'amour d'une mère) が、僕にとってなんだろう。彼〔司祭〕の神、人々の選ぶ生活、選択する運命などがなんだろう」(169)と叫ぶ。あくまで神への帰依を強いる司祭に激昂してムルソオはこれらの言葉を吐いた。そうした文脈からすれば「母の愛」という言葉はここでは場違いなものだ。ムルソオは語るに落ちたと言うべきであろう。息子の自分に対する「母の愛」こそが彼の「人生」の唯一無二の「意味」(99)であったことをムルソオは、失錯行為にも似た形で、我知らず明してしまっているのである。

だが、メランコリー期にある、あるいは気分が鬱しがちの母親は、「分別ははたらいて」いるのだが「なにごとにつけても愛情が欠けている。」<sup>122)</sup>そして、子供は自分と「つながり」のない「よそよそしいもの」と見える。そこで、育児は「習慣」に支えられる「愛の仕事」と化し、子供は「操り人形」のように思い做されていることであろう。

逆に、そうした母親は、確かに悲哀のうちにあるのだが、「そこには悲哀に必要不可欠の感情の動きが欠如している」(強調は原著者)ので「メランコリー性の《哀しみ》は周囲に伝導を及ぼさず、共感の心の動きを起さない」<sup>123)</sup>のである。従って子供は母親の哀しみにすら与ることができないわけで、幼児の眼にも母親は一個の「自動人形 (automate)」, 育児機械と映るに違いない。又、子供の眼の前に確かに母はいるのだが、メランコリーの母の「自己は自己自身のもとにはいないのである。」<sup>124)</sup>(強調は原著者) 母の「自己」は「ひもが切れてしまった」のであり、「底の方に沈みこんだまま浮び

上がれなくなってしまった」のだ。この「心はそこにはない」<sup>125</sup>母の「自己」はどこにあるのか、と子供は問うに違いない。そして、それはきっと誰かの許にあると想うに違いない。誰か、として先ず思い付かれるのは亡き父であるが、その父について母は「確か」な思い出としては唯一つ、おぞましい逸話しか息子に語り残さなかった。とすれば、母の「心」が亡き父の許にあるとは息子には思えまい。

ムルソオの「決して口にしたくない事柄」(103)の一つで、又「決して口にし」なかったことだが、彼の母親は「生前」(13)に、養老院での「許婚」としてのペレのような存在を持たなかったであろうか。確かに「将来はうつ病者にとっては終り<sup>ランアフヘーブパール</sup>のない現在であるか、過去のものの反復であるかである」<sup>126</sup>が、丁度サラマノの飼犬が「八年間続いて」いた「毎日」同じ「道筋を変えない」(43)という判で押したような「生活を変える」(64)ために、飼主の「夢にも思い」(60)つかなかった「脱走」(59)を果たしたように、ムルソオの母も又「機械の運行 (la mécanique) から逃れること、不可避にどこか逃げ道があるかを知」(152)ろうとしなかったか、「脱走の可能性」(153)を探り試みようとはしなかったろうか。

心ここにあらざる風の母親に遺棄されるのではないかと日々脅えていたであろう幼少年期のムルソオは、一方で「ママも僕ももうお互いに何も期待し合わなくなっていた」(125)というような、母親の「無感覚」に報いる己が「無感覚」の防衛機制を発達させていったであろうが、他方ではやはり「愛着行動」が阻害されたことからくる恨みと怒りは積み重なっていくし、又抑制された「愛着行動」は無意識的な弥増さる合体願望となってムルソオを衝き動かさずにはおかなかったことであろう。母がいつの日か息子との共生的な絆からの「解放」を密かにもくろみ、息子の知らない所で息子の「知らない」(19)い「許婚」と「すべてを生き直す気にな」(171)りはすまいかと息子は怖れ続け、「心はそこにはない」母の様子からそれは殆ど「確信」(163)されさえしていたであろう。もしそうした隠の「許婚」に類する者の存在が噂に

でも息子の耳に達することがあったならば、彼が内に潜めた合体願望とそれ故に理想化された内的な母親像に照して、息子はそれを「ごまかし〔不実〕(tromperie)」と受け取ったことであろうし、母の「望みは、ただてめえの道具でいい思いをしてえだけなんだ」(48)と難じたことであろう。

母親の眼に自分の子供が「よそよかしいもの」に映るということは、彼女の心の中にある子供のイメージが「自動人形」に、「身動きしない死体〔生氣なき物体〕(un corps inerte)」(88)に化しているということだ。端的に言えば、子供は「死んだ対象」になっているのである。そうした子供は、母親との一体感を感じようとするならば、この「死んだ対象」の役割に調子を合わせるか、そうでなかったら、子どもは死んだという〔母親の〕先入観を打ち消すための活気をもたねばならなくなる。〔……〕生きること、生きているようにみせること、生きていることを伝達することである。』<sup>127)</sup>(傍点部、原訳書はゴチック) 幼児を遺棄することはこれを殺すことに等しいのであるから、「心はそこにはない」母親は「心の中で」幼児を遺棄し、且つこれを殺そうとするのだと、少なくとも幼児の眼にはそのように映るのだと言えよう。だから、「機械の運行」に似た母の育児から受ける印象と相俟って、母が「父について語ってくれた話」(154)の、「父」が「見に行っ」て逃げ帰ってきたという「処刑」(155)を、この「話」を母の口から繰り返し聞かされた幼い子供は、自分自身の「処刑」のことであり、処刑台は母なのだ<sup>128)</sup>と無意識に思い做したことであろう。そしてそれはごく当然の心理過程なのだ。幼児は彼を遺棄している母への無意識的な殺意から、この「話」の中で「処刑」される「ある人殺し」と、自分自身を同一視したであろうからだ。又、死にたくもなく、殺したくも殺されたくもなければ、自分が生きていることを母親に「伝達」しなければ、「活気をもたねばならなくなる。」「俺はまだ生きてる！」<sup>128)</sup>、そう叫ばねばならない。

一方には、生きていうちから既に「何の意味もない」、「死んだ女」(20)に等しいものとなった母親、自らが「死人のように生きている」(169)こと

によって息子をもそうした状態に陥らせてしまう、つまりは「心の中で〔精神的に〕」息子を殺す母親がおり、他方には、怨恨と敵意からこの母を「心の中で殺」し、更に怨霊としての母に取り殺されるがままになることによって母に結び付こうとする息子がいる。つまり、母親の地獄堕ちを念じながらも、「お母さんにつながれているので、ぼくも一緒に地獄に行かねばなりませんでした」<sup>129)</sup>という息子がいるのだ。

このような息子は又、生きながら「死んだ女」となった母親に最早「何も期待」することなく、自身「もうひとりの新しいムルソオ (un nouveau Meursault)」(170)として「活気」のうちに蘇り、次々と立ち現われる「もうひとりの新しい」母親(代理者)との「新しい生活 (vies nouvelles)」(125)によって「すべてを生き直」そうとしもするであろう。そして、この「新しい」母親(代理者)も「病気」になったり「死んだ」りすれば無論のこと、「情婦であることに多分うんざりしたのだ」と察せられただけでも、「もう僕は興味はない」し「もう僕と何の関係もない」として「忘れてしまう」(161-162)ことであろう。何故なら、いずれにしてもそれは「死んだ女」なのであり、それは息子の「活気」を損い、「この地上」(167)で生きている母と「一致」(76)し「うまが合う〔よく分り合える〕(s'entend bien)」(75)可能性を見失わせるものだからである。

このようにして幼少年期のムルソオの心中に、メランコリーの母という「同一の人物に対する愛と憎しみの、しかもきわめて烈しい二つの感情の慢性的な併存」があり続けたとするならば、そして、「その一方である憎しみの方が一般に抑圧されてしまう」ということによってムルソオとその母の「奇妙な愛情生活」<sup>130)</sup>が説明されうるとするならば、分裂した「愛」と「憎しみ」のそれぞれに対応して、母親(代理者)のイメージも〈良い母〉のそれと〈悪い母〉のそれに分裂して現われることであろう。勿論息子自身の内的な自己像も〈良い子〉と〈悪い子〉に分裂する。

実の母は〈良い母〉のイメージを担い切れず、これに「期待」することは

却って潜在的な「憎しみ」を活性化させることになるので、〈良い母〉のイメージは母親代理者達の上に投射される。又、実の母が身に負っている、〈悪い母〉を証し立てる様々な事実も、可能な限り良い目で見られ理想化される。無論、分離され抑圧された〈悪い母〉のイメージは他の母親代理者達の上に投射される。そこで、ムルソオが「母親に抱く奇妙な感情」が、彼が母と母に対していた自分について持った「幼少年期の潜在的で、身体的な思い出」がプリズムを通したように、「実に多種多様な局面」に「現われ」てくることになるのである。

即ち、共感を拒んで引き籠もり幼児に機械的に対応するという否定的な母親イメージを投射された母親代理者として、「看護婦代表」、「自動人形の女」が現われる。心ここにあらざる母親のイメージが投げ掛けられた「裏切」る母親代理者として、レエモンの「情婦」、「脱走」してサラmanoを置き去りにする「スパニエル犬」、「死刑囚の情婦であることにうんざりした」マリーが現われる。性に魅かれて息子を忘れる母親代理者として、「下疳」に冒された、ムルソオの母親付きの「看護婦」、レエモンの情婦、「もうひとりの新しいムルソオに唇を与え」(170)るマリーが現われる。そして子供を遺棄することで子供を「心の中で〔精神的に〕殺」そうとした母親のイメージを担って、息子の「チェコスロヴァキアの男」(113)を息子とも気付かずに殺してしまう母親が登場するのである。

抑鬱故に言葉も身振りも乏しい母親イメージそれ自体が理想化されたものが、あるいはそれへの反動から形成された理想的な母親像が投射されて、一方には、囚人の「息子」と共に「沈黙の小島」(108)に閉じ籠もる母親が現われ、他方には、「活気」に満ち溢れた、生きている女としてのマリーが現われる。更には、「優しい無関心」を示す「世界」にも又、メランコリーの母という親しく且つ疎遠な存在が、「現存 - 不在の対象」<sup>131)</sup>が理想化を蒙って投影されているのである。ムルソオが「初めて心を開いた」という「世界」の優しい無関心 (tendre indifférence) (171-172) とは、理想の母即「世界」が

息子を包む「情愛の (tendre) 非差異 (indifférence)」でもあった筈であるからだ。

(この項おわり)

〔注〕

- 83) フロイト『精神分析学入門』, p. 411. / 84) J. Gassin: *op. cit.*, p. 225. / 85) ガサンは『裏と表』に描かれている、カミュの実母と覚しき「母親」の姿勢と、『ベスト』の中に描かれているリウーの「母親」のそれとの一致に注意を促している。それは、部屋の隅の椅子の上で「膝の上に両手を組み合わせて」じっとしている姿勢である (J. Gassin: *op. cit.*, p. 209.)。「審問の間中」セレストが取っていた姿勢はこれらの「母親」達のそれを想起させるのである。又、ムルソオの言によると、彼の母は「家にいたとき、ママはいつも黙って僕のすることを目で追うだけであった」(12)というから、この「ママ」も部屋の片隅で椅子の上に腰掛けたまま、「膝の上に両手を組み合わせて」じっと「目で追」っていたのかもしれない。86) J. Gassin, *op. cit.*, p. 212. / 87) *Réponses à Jean-Claude Brisville*, 『エッセー』収録, p. 1922. / 88) P. ギロー『言語と性』, 中村栄子訳, 白水社, pp. 149-150. (Pierre Guiraud: *Sémio-logie de la sexualité*, Payot, 1978, pp. 104-105.) / 89) Pierre Guiraud: *Dictionnaire érotique*, Payot, 1978, p. 227. / 90) J. Gassin: *op. cit.*, p. 165. A. Costes: *op. cit.*, p. 72. / 91) P. Guiraud: *op. cit.*, p. 536. / 92) P. ギロー『言語と性』, p. 149. (原書, p. 104.) / 93) P. Guiraud: *op. cit.*, p. 380. / 94) ボウルビイ『母子関係の理論』III, 黒田三郎・吉田恒子・横浜恵三子訳, 岩崎学術出版社, pp. 149-150. / 95) 同書, p. 426. / 96) テレンパッハ, 前掲書, p. 168. / 97) クラウス, 前掲書, p. 154. / 98) テレンパッハ, 前掲書, p. 223. / 99) ボウルビイ, 前掲書, p. 32. / 100) D. W. ウイニコット『情緒発達精神分析理論』, 牛島定信訳, 岩崎学術出版社, p. 95. / 101) 同書, p. 100. / 102) 同書, p. 295. / 103) 同書, p. 162. / 104) 同書, p. 70. / 105) ボウルビイ『母子関係の理論』III, p. 39. / 106) 同書, p. 75. / 107) テレンパッハ, 前掲書, p. 168. / 108) 同書, p. 204. / 109) Albert Camus: *L'Envers et l'endroit*, Gallimard, 1958, p. 66. / 110) ウイニコット, 前掲書, p. 75. / 111) 同書, p. 51. / 112) ボウルビイ, 前掲書, p. 283. / 113) 同書, p. 42. / 114) 『手帳 1』, p. 15. / 115) ボウルビイ, 前掲書, p. 75. / 116) クラウス, 前掲書, p. 131.

117) 拙論はここで、分裂病像乃至パラノイア-ソゾイド態勢における障りに起因する精神病像を範型としてムルソオ=カミュの精神構造を分析しその言動を了解しようとする従来の精神医学的、とりわけ精神分析的アプローチに対して、観点の転換を求めているわけである。



A. コストはカミュの作家活動を三段階に別って、第一期を「〈不条理〉期」と呼び、「精神病的構造」が支配的な時期とした(A. Costes: *op. cit.*, p. 46.)。この第一期には、『表と裏』、『カリギュラ』、『結婚』、『幸福な死』、『異邦人』、『シーシュポスの神話』、『誤解』という初期作品群が含まれる(*Ibid.*, p. 47.)。

第一期の「精神病的構造」とは、コストの見るところでは、「シゾイド的構造」(*Ibid.*, p. 74.)であるが、「シゾイド的構造の二つの柱は自我の分裂と現実との接触の喪失」(*Ibid.*, p. 97.)である。それが病状として表われたのが「離人現象」(*Ibid.*, p. 75.)である。コストは、この「離人現象」を初期作品群のテキストのうちに高い頻度で確認することができる。そして、あれこれのテキストを事例として挙げてコストが「シゾイド」と言い、その症状としての「離人現象」と言うとき、彼がしばしば分裂病の症例を引証しているところに明らかなように、それは分裂病と言うのと同じである(*Ibid.*, pp. 51-59, etc.)。例えば「僕〔ムルソオ〕は思った、相変わらずの日曜日がやっと終わった、ママはいまでは土の中、自分は又仕事に帰る。結局、何も変わったことはない、と」(39)という一節に対応するものとして、「早発性痴呆の患者」の症例記述を挙げているとき(*Ibid.*, p. 57.)、ムルソオの言動は明らかに分裂像を範型として了解されうるものとされているのである。

他方でコストは、「作者とその創造物を切り離すことは不可能である」(*Ibid.*, p. 69.)という立場から、作品に見られるシゾイドの心性の表現が由って来たる原因を作者の生育史に求め、「カミュには、その人生の最初の数カ月において、母性的愛撫に関するフラストレーションがあった」(*Ibid.*, p. 91.)とする。先ず「触覚的なフラストレーション」があり、これに「もう一つの全く口愛的なフラストレーション」が加わる。カミュの母親が実際に貧弱な母乳しか与えられなかった可能性もあるのだが、そうではなかったとしても、「触覚的なフラストレーション」だけでも「この上なく寛大な乳房をも《悪い》ものにしてしまうに充分である」のだから、結局「まるでカミュが口愛的段階の極めて早い時期にフラストレーションを蒙ったかのように全ては進行する」のである(*Ibid.*, p. 127.)。そして、「カミュの多くの作品にその痕が見出される、この極めて明白な口愛的固着は、シゾイド的構造の枠組にまったく一致するし、不可分のものではある」(*Ibid.*, p. 96.)と言う。

コストはカミュの語るシーシュポスの神話(Albert Camus: *Le Mythe de Sisyphe*, Gallimard, 1942, pp. 161-166.)のうちに「躁的抑鬱的構造の支配」(強調は原著者)(A. Costes: *op. cit.*, p. 114.)を認め、「躁的防衛」(*Ibid.*, pp. 114, 203.)の存在をも認めるのだが、「遅かれ、早かれ、抑鬱的退行が支配するに至る」(*Ibid.*, p. 115.)と言う。そして、シーシュポスの責め苦が象徴する「虚しく終わった排便の場面は、肛門期的演出における、口愛期に現実に経験されたフラストレーションの再生を成している」とする。というのも、口愛期の子供にフラストレーションを蒙らせた母親は、た

とえ肛門期には打って変って「息子とその排泄物の故にどれほど称讃するに急な母親であろうと、時代錯誤のものとなった欲望に糧を得ているナルシシズムの要求を充たすことは決してできなかったであろう」(Ibid., p. 117.) からである。

そして、「《不条理》期」には「シゾイド構造」が支配的であることの証左として、例えば、『幸福な死』には「唯の一つの〔躁的な〕防衛も、唯の一つの躁的な徴候も見出すことは不可能」であって、そこで用いられている「防衛は全く別」のものであり、「投影と理想化」によって構成される防衛であると述べている (Ibid., p. 63.)。

こうしたコストの「伝記とテキストを調和させ」(Ibid., p. 19.) ようとする議論には、伝記、理論、方法の三つの水準でそれぞれ難点がある。

先ず、伝記の水準で言えば、コストは一つの重要な事実を見通している。即ち、カミユの父親が死んだ時期である。コスト自身、それはカミユが生後9カ月のことであるとある箇所述べているにも拘らず (Ibid., p. 23.)、それと「母性的愛撫に関するフラストレーション」とを全く関係付けていない。事實は、次男アルベール・カミユは1913年11月7日に生れた。父リュシアン・オーギュスト28歳、母カトリーヌ31歳のときである。父親はマルヌの戦いで致命傷を負い1914年10月11日に亡くなっている。アルベールが生後11カ月のときである。カトリーヌはその死を知らせる電報を受け取るのだが、「この電報と、加うるに彼女の夫の頭蓋から取り出された砲弾の破片が送付されてきたことによるショックがカトリーヌに心理的外傷を与えたが、その様子については、彼女の息子は自分の幼年時代について様々に書き残しながら、決して言及しなかった。彼女は発作に襲われたように思われる。家族は脳膜炎の名を口に上せた。(脳膜炎は細菌に因る病気であるが、しばしば誤ってショック状態を指すためにこの語が用いられるのである。)彼女の妹のアントワネットの指摘によると、それ以後、彼女の物言いは混乱したものになった。カトリーヌは多少とも尋常の話し方で話すことができたのだが、彼女は見当違いの言葉を口に出し始めたのである。それが彼女には内輪の者でない人達に対して彼女を大変内気にしたのである。

このハンディキャップ——その原因を彼女の息子のアルベールがよく理解したとは確言できないが——と、加うるに、彼女に話すのに声を上げる必要がなかった程の読唇の能力が埋め合わせをしていたとはいえ、部分的な難聴、及び彼女が読み書きができなかったことが、自分の子供達がこれから成長していこうとする家族の中で彼女を極端に受動的な一員にしたのであった。」(H. R. Lottman: *op. cit.*, pp. 29-30.) カトリーヌは1882年11月5日生れで、「際立ってひ弱で繊細な子」(Ibid., p. 24.) であった。夫の死の報に接したのは、32歳になろうとするときであった。長男リュシアンは1910年1月20日生れで、このとき5歳近くになっていた。そして、1914年7月末の父の応召まで、両親と一緒にいた (Ibid., pp. 27-28.)。リュシアン・オーギュストが実際に家族と別れた時期はもう少し遡る可能性もあるので (Ibid., p. 28, 脚注

9.)、アルベールの前から父親の姿が消えたのは彼が生後7乃至8カ月のときということになる。父親の面影がアルベールの記憶に全く残っていないのも当然である。

少なくともロットマンのカミュ伝の中には、カトリーヌとその夫、更には彼等の長男リュシアンが分裂病質乃至気質であったことを証するような逸話や証言の類は何も記載されていない。従って、長男リュシアンの幼年期においては、母カトリーヌは可もなく不可も無い「ほぼ良い母親 (Good-enough Mother)」であったように思われる。それ故、リュシアンは「九分九厘その弟と同じ出来事を生きたのであり、同じような情緒的環境で生きた」(A. Costes: *op. cit.*, p. 21.) とは言えないのである。又、次男アルベールに対してもその「人生の最初の数カ月」においては、格別「母性的愛撫のフラストレーション」を起こさせるような母親であったとも思われぬ。結局アルベールとその母親の母子関係が異常を来したのは、アルベールが生後11カ月、母親がその夫の死の報に接し、「精神的外傷」を負いそれが後遺症を残して以降のこととするのが妥当と考えられるのである。

次に、理論上の問題点である。コストは「口愛期固着」(*Ibid.*, p. 96.) と「シゾイド構造」, 「加虐 - 肛門期」(*Ibid.*, p. 113.) と「躁的・抑鬱的構造」(*Ibid.*, p. 114.) がそれぞれ対応し合うかのように説いている (*Ibid.*, p. 136.)。しかし、「[メラニー・] クライン的観点」(*Ibid.*, p. 64.) からすると、「妄想的 - 分裂的態勢」と「抑鬱的態勢」は「口愛期 oral phase をさらに細かく分けたもの、つまり、前者が生後3~4カ月に相当し、それにつづいて後者が生後1年の後半にあるとみることもできる。」(H. スィーガル『メラニー・クライン入門』, 岩崎徹也訳, 岩崎学術出版社, 「まえがき」 p. 7.) つまり、抑鬱的態勢はアーブラハムの言う、反対感情併存が現われる口愛期後期にほぼ相当するわけである。

又、コストは、躁的抑鬱的態勢に特徴的な防衛機制としての「躁的防衛」は、「投影と理想化」(A. Costes: *op. cit.*, p. 63.) そして「投影性同一視」(*Ibid.*, pp. 76-77.) と無縁であるかのように扱い、「投影と理想化」並びに「投影性同一視」を「シゾイド的構造」の防衛機制であるとしているが (*Ibid.*, p. 63.)、これもクライン派の説くところでは、「抑鬱的態勢における躁的防衛をかたちづくる要素としては、妄想的 - 分裂的態勢ですでに存在していた諸機制、すなわち、分裂、理想化、投影性同一視、否認等が含まれる」(H. スィーガル, 前掲書, p. 114. なお pp. 22-23 も参照) のである。だから、「分裂」や「投影と理想化」や「投影性同一視」が見出された場合、それらが「より統合された状態」における自我と対象との関係で生じていないかどうか、自我が対象との関係で「依存性と一緒にも両価性」を示していないかどうか、又それらが「とくに抑うつ不安と罪悪感を体験することに対して向けられて」(同書, p. 114.) いないかどうかが問われなければならないのである。拙論は既に、コストが『幸福な死』とともに「〈不条理〉期」に組み入れている『異邦人』のうちに幾つかの

躁的防衛の働きを確認している。又、「妄想的-分裂的態勢」に特徴的な心的機制が現われているからといって、それが「抑うつ的な葛藤に対する防衛」としての「退行」(同書、「まえがき」p.7.)の結果でないかどうかは検討されなければならない。例えば、拙論は「離人現象」の現われを抑鬱の増悪という観点から説明しえたのである。

第三に、方法に関わる疑義である。「“態勢” position」とは「一生を通じて存在しつづける対象関係、不安、そして防衛の特定のあり方を意味する」(同書、p.7.)のであるから、「妄想的-分裂的態勢」に特徴的な心的機制が仮に頻繁に用いられているのが確かめられたとしたところで、それは直ちにはその態勢における障碍の存在を証示するものではない。況や、分裂病様の症状の存在を証するものではない。何故なら、「妄想的-分裂的態勢の核をなす不安や防衛は人間の正常な発達過程の一部分なのである」し、「どんなに正常な人でも発達早期の不安がかきたてられて、早期の防衛機制が働くに至るような状況にぶつかることがある」からであり、更には、それらの心的機制は正常な成人においても積極的な「役割を演じて」(同書、pp.49-52.)いさえるからである。

例えばコストが、「カミュ的自我の分裂について確信を得」て「カミュの心性のシゾイド的構造は最早疑う余地がない」(A. Costes: *op. cit.*, p.84.)と断定したのが、『結婚』の次の如き一節を引き合いに出してのことであると知ると、読者は啞然とせざるを得ない。「まもなく、世界の隅々に広がって、僕は、自分を忘れ、自分自身からも忘れられて、今やこの風であり、そして風の中のこの柱列とこのアーチ、燃え立つこれらの舗石とこの無人の町をめぐるあの蒼ざめた山々なのである。そして僕が、これほど深く、同時に僕自身からの超脱と世界への僕の現前を感じたことは決してなかったのだ。」(Albert Camus: *Noces*, Gallimard, 1950, p.35.)ここに、コストは、彼の議論の文脈からして明らかに、「病的」(H. スィーガル, 前掲書, p.76.)と言える「投影性同一視の過程」を見て取っており、「世界に投影された自我は、風景を成す要素の多様さに助けられて、なお一層解体する」(A. Costes: *op. cit.*, p.83.)と説明している。だが、たとえこの場合「僕」が体験をありのままに記述しているとしても、そしてそこに「自我」の「解体」が述べられているのを認めるとしても、「離人現象」の一つの「柱」としての病的な「自我の分裂」は認められまい。「僕」は「風」との、「世界」との一体感を語っているだけなのである。更に、「離人現象」のもう一方の「柱」は、「現実との接触の喪失」であるが、それを同じ『婚約』の中のテキストが力強く否定していることがコストの目には入っていないのである。例えば、「僕は、これから先に生きていく人々、花々や女達への欲望が肉と血からなる意味の一切をもちうる人々が妬ましい。僕は羨ましいのだ。何故ならエゴイストでないためには余りに僕は人生を愛しているからだ。」(A. Camus: *op. cit.*, p.40.)

結局コストの「自伝とテキストを和解させる」という方法に従っても、「《不条理》期の作品の主人公達、例えば『異邦人』の主人公ムルソオ＝カミュは、妄想的-分裂的態勢における「母性的愛撫」の欠損に起因する「シゾイド構造」の心性の持主で、しばしば「離人現象」など分裂病様の症状を来す、分裂病像を範型としてその言動が了解可能な人物であるとは言えないのである。妄想的-分裂的態勢における「触覚的フラストレーション」も「口愛的」なそれも常人並みであったのであり、幼いカミュが異常なフラストレーションに見舞われるようになったのは、生後11カ月以降、即ち躁的-抑鬱的態勢に入ってからかなりしてからのことなのである。

妄想的-分裂的態勢を「円滑に、また比較的支障のないかたちで」乗り切るための「必要な前提条件は、良い体験の方が、悪い体験よりも優勢でなければならないということである。」(H. スイーガル, 前掲書, pp. 51-52.) 幼いカミュは、少なくともその「人生の初めの数カ月」においては、「良い体験の方が、悪い体験よりも優勢」であったと思われる。それは、カミュの所謂口愛期固着を示すと看做されるテキストの表現が、抽象的なものではなくて、豊かな生命的意味内実に充たされているのを見れば明らかであろう。だが、次の段階の躁的-抑鬱的態勢が乗り切られるためには、「愛情」が「憎悪」に勝っていかなければならないし、「償いをしたいという衝動が優勢」になり、それと相関的に「現実検討能力が増大」していかなければならない(同書, pp. 126-127.)。即ち、「心的現実の認識、および嫉妬と攻撃的な感情の認識とともに、償いは容易な仕事ではないという認識も生じ」(同書, p. 139.) て来なければならない。カミュの場合には、その母親が「精神的外傷」を受けて抑鬱に陥り、緩解後もそこに後遺症としての発話障害と生来の「難聴」が加わって、抑鬱的制止故のあるいは抑鬱様の「極端に受動的」な態度をとったことから、口愛期後期にフラストレーションが起り、心的発達過程に阻害がもたらされたのである。一見して「シゾイド的構造」が支配的であることの証左と見える現象も、「抑鬱的感情が極に達して、再び何らかの退行が起こっ」(同書, p. 97.) た結果なのである。

118) E. ジェイコブソン『自己と対象世界』, p. 44. / 119) H. ガントリップ, 前掲書, pp. 11-12. / 120) ジェイコブソン, 前掲書, p. 62. / 121) S. フロイト『悲哀とメランコリー』, 井村恒郎訳, フロイト著作集第6巻収録, 人文書院, p. 143. / 122) テレンバッハ, 前掲書, p. 300. / 123) 同書, p. 153. / 124) 同書, p. 309. / 125) 同書, p. 302. / 126) A. クラウス, 前掲書, p. 209. / 127) ウニコット, 前掲書, p. 235. / 128) Albert Camus: *Caligula*, suivi de *Le Malentendu*, nouvelles versions, "Folio", Gallimard, 1958, p. 151. / 129) ジェイコブソン, 前掲書, p. 205. / 130) フロイト『恐迫神経症の一症例に関する考察』, 小此木啓吾訳, フロイト著作集第9巻収録, 人文書院, pp. 274-275. / 131) A. Costes: *op. cit.*, p. 143.